

農産廃棄物の資源化技術セミナー（フィリピン）に参加して

鹿児島県工業技術センター
所長 原 尚 道

国際協力事業団 (JICA) はフィリピン政府の要請に応じて、フィリピンの代表的な農産物であるココナツと米、およびこれらの処理工程で派生する副産物から化学物質を生産する技術の研究開発を、二国間研究協力プロジェクトとして同国の科学技術省所属の産業技術開発研究所 (Industrial Technology Development Institute=ITDI) と進めてきた。今回のセミナーは、このプロジェクトで得られた成果と関連する内外の新技术を紹介・討議することによって工業化へのステップにしようという目論見で計画されたもので、9月12日、マカティ市のニューワールド・ホテルを会場に、参加者が百名程の親しみやすい1日セミナーとして開催された。講演は以下の7件である。

①日本における流動床技術の最近の動向

平間利昌（北海道工業技術研究所）

②緩効性カリ肥料の製造

L. G. Dominguez (ITDI)

③緩効性肥料の肥効試験

N. E. de la Cruz（中央ルソン州立大学）

④もみから利用高品質活性炭の製造

C. F. Alfonso (ITDI)

⑤超臨界抽出と木質バイオマスの分解

柴田昌男（九州工業技術研究所）

⑥ココナツからの界面活性剤と化学物質

A. L. Gonzales (ITDI)

⑦もみから灰利用ケイ酸カルシウム材料

原 尚道（鹿児島県工業技術センター）

講演はいずれも最近注目されているゼロエミッション技術に関連するものである。それだけに参加者からの反響は大きく盛会だった。筆者が紹介した技術は実用可能性を検証するためのパイロットプラントがマレーシアに建設されており、現在

も運転中であるため、皆さんの興味を引いたのかたくさん質問をいただいた。近々マレーシアに見学に行きたいという熱心な人まで出てきて、発表した甲斐があったと喜んだ次第である。

セミナーの前日は産業技術開発研究所を見学した。ここは、化学物質・鉱物、電子・プロセス制御、環境、食品加工、燃料・エネルギー、材料科学、微生物・遺伝子学の7研究部を有する国立の総合研究所である。材料科学部ではピナツボ火山噴出物の利用について多様な研究を進めていた。当センターのシラス利用研究と類似するところも多いので今後の交流に期待したい。

13日は油脂工場と石鹼工場を見学した。決して新しいとはいえない機器が多いが、よく手入れをして使いこなしているのに感心した。日本にも輸出しているが品質規格がきびしくて苦勞しているという話も出た。

さて、鹿児島県も国際化時代といわれるが、当センターの職員には海外渡航の機会はなかなか巡ってこないのが実状である。研究成果を国際会議に発表しようにも予算がなく、やむなく休暇をとって私費で参加するというケースが続いている。筆者の場合、フィリピンとの共同研究を中断して当県に出向させられたという経緯があるので、フィリピンには一度行きたいと思っていた。それが国際協力事業団のおかげでようやく実現できて心から感謝している。

いうまでもなく県内産業はとくに国際化の荒波にもまれている。そういう産業の「技術的拠りどころ」として当センターが十分に機能するため、せめて国際化時代に取り残されないためにも、当センター職員に海外経験の機会を数多く与えるよう今後一層努力する必要があると考えている。